〔産業社会学部子ども社会専攻小学校教員養成課程開設記念シンポジウム〕　2006年12月３日(日)

会場：衣笠キャンパス
以学館２号ホール

子どもたちが輝く社会とは
―現代社会のあり方を子どもの視点から問う―

（プログラム）

開会のあいさつ	國廣敏文（立命館大学産業社会学部長）
基調講演	陰山英男（立命館小学校副校長，立命館大学教育開発・支援センター教授）
パネル討論	
	【パネリスト】
	陰山英男（立命館小学校副校長，立命館大学教育開発・支援センター教授）
	高垣忠一郎（立命館大学産業社会学部教授・応用人間科学研究科長）
	大谷いづみ（立命館大学産業社会学部教授（2007年４月就任予定））
	野間裕子（読売新聞大阪本社編集委員）
	【コーディネーター】
	荒木穂積（立命館大学産業社会学部教授）
閉会のあいさつ	景井　充（立命館大学産業社会学部助教授）

１．主旨

世界中のどこでも経験したことのない早さで日本は少子高齢化社会にむかってすすんでいる。日本の将来はどのような方向にすすむのかだれもが強い関心をもっているが，来るべき未来社会のすがたはまだ漠然としている。しかし，はっきりしていることは未来社会の担い手となる子どもたちが現代社会の中で，豊かな人格を育み，生き生きと輝くことなしには，明るい展望のもてる社会を構想することはできないということである。現代の子どもたちは『子どもの権利条約』のある時代に生きている。

20世紀前半には，子どもは最優先で戦争や貧困，飢餓から保護される存在であることを世界史上はじめて宣言した。そして20世紀後半には，保護されつつも子どもは大人と同様に主人公として生きる存在であり，その意見は最大限尊重されなければならないことを宣言した時代でもあった。

このような子どもの権利に内実をあたえる社会の実現を20世紀の大人たちは子どもに約束したといってよいだろう。地球上のあちこちに，個性を最大限開花させることができる社会がどれほど多く実現するかは，21世紀に生きる人たちに科せられた大きな実践課題であるといえるのではないだ

ろうか。

このような社会にあって，家庭や学校，地域は，子どもたちの発達的源泉としてますますその果たす機能の重要性はましてきている。子どもたちが発達のエネルギーを蓄え，飛躍をとげて行く源泉が疲弊し，枯渇しはじめていないかを点検し，早期の対策を講じることは大人の責任である。

少子化がすすむ中では，子どもたちが切磋琢磨する場としての学校や地域はますます重要な役割を果たすことが期待されている。また，教師は同時代を生きる大人として人類の蓄積してきた豊かな知識や文化遺産を子どもたちに教え，伝える責任を担っているが，同時に未来を想像し，創造する人格を育てる役割も担っている。教育や教育者の役割はますます重要になってきている。

日本の子どもたちは，早い時期から競争を強いられ，大きなストレスの下で生活していると指摘され続けているが，これは現代の日本社会の縮図であるともいわれている。同時代に生きる大人たちも大きなストレスのなかで生活している。昨今，「再チャレンジ社会」の実現がさけばれているが，人生の早い時期の失敗が将来を縛り続けるとしたら，高齢化社会はなんと味気ないものになるだろうか。人生の折々に再学習や再教育の機会が織り込まれ，新たな人生へと飛躍するための豊かな発達的源泉は大人にとっても求められているのが，現代の日本社会ではないだろうか。

本シンポジュウムは，子どもの視点から，現代の日本社会を見つめ直し，未来社会のあり様を考えて行くことを目的としているが，それはとりもなおさず現代の大人のあり方も同時に問うものとなるだろう。

このような問題意識の下に，活発なパネルディスカッションを展開して行きたい。

開会挨拶

景井　司会を務めさせていただきます，産業社会学部教員の景井でございます。それでは，開会にあたり学部長がご挨拶を申し上げます。

國廣　皆さんこんにちは。開会にあたりまして一言ご挨拶をさせていただきます。日曜日，このシンポジウムにお出でいただきましてありがとうございます。大学を代表いたしましてお礼を申し上げます。今日のシンポジウムの趣旨について一言ご紹介させていただきます。

来年４月から立命館大学産業社会学部は大きく変わります。現在，人間福祉学科，産業社会学科の２学科制ですが，来年から１学科５専攻にします。その中で新しく立ち上げますのが「子ども社会専攻」という，端的に申しまして小学校教員の養成課程をおく専攻です。「スポーツ社会専攻」もございます。１学科５専攻ということですが，現代の社会が抱えている問題，子どもたち，人々が抱えている問題は，それそのものとしてはなかなか解決できない。子どもを取り巻くさまざまな事件，事故の問題についても，子どもたちだけに目を向けていたのでは解決できない。社会の中で，地域の中で，親との関係の中で，複雑な関係の中でそういう問題が生じていますし，考えなければいけない。そういうところから来年の改革の大きな目玉は，５つの専攻を超えて学ぶことができる

“クロスオーバーラーニング”，たとえば子どもと福祉，子どもとメディアの問題という立て方も可能です。さまざまな問題をクロスオーバーに学際的に学ぼうということが一つ特徴としてあります。

もう１点は，大学で，頭の中だけで学ぶだけではなく，実際に現場に出ていって，目で見て，体験し，声を聞き，それをまた学校に持って返って再び理論的にも検証する。そうした“アクティブラーニング”も大きな学部の改革の柱にしています。我々が子ども社会専攻を立ち上げる場合，教育学部が育てる教師ではなく，学際的な，我々しか育てられない教師を育てたい。スポーツ社会専攻もそうです。体育学部や体育学科で育てる学生ではなく，もっと幅広い視野を持った学生を育てたいと願って今回の改革をさせていただきました。

その一環として今日のシンポジウムが開かれます。子どもたちをめぐって，どんな問題が起きていて，それについて我々はどう認識をして，どう考え，行動しないといけないのかということの示唆をいただけるのではないかと考えています。私も一緒になって話を聞いて考えていきたいと思います。簡単ではありますが，私からの開催の挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

景井　続きまして，陰山英男先生の基調講演をいただきます。陰山先生は，2006年度から立命館大学教育開発・支援センター教授として赴任していただいております。立命館小学校副校長を兼任していただき，日々，学園の発展のために奮闘いただいている次第です。著書として『本当の学力をつける本』『奇跡の学力』『土堂小学校の陰山メソッド』などがあります。現在，教育再生会議の有識者として，現場での実践経験に基づく意見を反映させるべく，政策的なところでも日々活躍していらっしゃいます。それでは陰山先生の基調講演をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。